

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 田北十生気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

11月支部委員会の報告

11月に支部委員会は、去る11月4日に行われました。出席者は、篠原、竹本、堤、中嶋、大館、井上、呑海、田北でした。

(1) 報告事項

- 1. 会費の納入状況
- 2. 全国委員会の報告
 - ①福岡大会の総括
 - ②新潟大会について

日程 1998年8月23日(土)～25日(月)

場所 蓬平温泉 よもやま館(長岡市蓬平町)→参加希望者は予定を

- ③ホームページの維持 →岡田(山口大学)、加藤(筑波大学)で維持
- ④論文集の発行と販売 → 定価3,000円 会員価格2,700円
- ⑤会費納入について
- ⑥97年度役員名簿は、訂正が多かったため改めて作成し、発行する。

(2) 審議事項

- 1. 支部報の発行
- 2. 97年度研究集会のテーマについて

検討の柱 ①「職員問題」ミニ研究集会では「人」に焦点をあてたので、今回は「仕事」に焦点を当てて考える。

②実務上のニーズに可能な限り応えられるものを考える。

研究集会についての意見・要望を

12月8日(月)までに支部委員へお寄せください。9日の支部委員会で検討します。

支部委員会では、電子図書館、アウトソーシング問題などがテーマとして論議がされています。

* (予定していましたが間に合いませんでしたので、急速穴埋め的に西田氏に原稿を増やして貰いました。幸い「数珠つなぎ」も2頁でした。)

目次	支部委員会の報告	1頁
	連載小説「リュウ」第1回	2頁
	数珠つなぎ(22)	6頁
支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付(京都橘女子大学)		
☎ 075-574-4118 FAX 075-574-4124		
♥ kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで		

リユウ

作 西田 治

それは、9月1日に始まった。まだ、残暑の厳しい日であった。僕は、覚悟していた。それで僕らは出かけた。銀杏並木の続く夜道を圭子は普通の歩調で歩いて行くのであるが、僕はといえば、ちょっと走っては立ち止まるので、結局、圭子の方が先に行ってしまうことになるのである。それは、僕が勝手にやっているわけではなく、龍太郎が、気ままなためである。

元来、僕は龍太郎に付き合うのが、好きなわけではないのだが、今夜から付き合いを断るを得なくなったのである。ところが圭子は、勝手に奴隷で、僕らに付き合っていてという、いわば他人事にしか考えていないのである。

圭子は、時折、あまり僕らから遠ざからないように、行きすぎたと思うと並木道の中央に立ち止まって、こちらを眺めている。僕も早く圭子に追いつきたいのであるが、龍太郎は、そんな僕の気持ちなんか眼中に無いのである。いや、正確に言えば、かまわれない程多忙なのである。彼、龍太郎は自分の生活に深く関わる重要な仕事に忙殺されていて、しかも、限られた僅かな時間内に、その仕事をやりあげなければならないのである。

なにも夜にしなくても良いのじゃないかと思われる方々に一言いっておきたいのであるが、昼間は、昼間でそれぞれ大切な仕事があってできないのである。従って、私的な仕事はもっぱら夜でなければ、できないのである。

龍太郎にしてみれば、昼間だって、もっと時間がとれれば、ゆったり出来るのであろうが、相手をする人がいなければ難しく、その相手は、昼間はみんな多忙なのである。一人ではできないということが龍太郎には、最大の難問なのである。龍太郎にとっては、一人でやるのが最も良いのであるが、そこは、社会が許さないのである。従って、家族の協力が是非とも必要になってくる。夜しか出来ないというのは龍太郎が決めたのではなく、家族で相談の上きまったのであるからして、従う以外に道はないのである。

まあ、こんな具合で龍太郎には、なかなか彼女にも会えないし、従って、恋愛も思うに任せず、今日に至るも独身なのである。

私にしてみれば、身寄りの無かった彼を引き取って育てるのに精一杯で、彼の恋人のことまでは、とても手が回らない。だからといって勝手に彼女を連れて来いとも言えないのである。言ったとしても彼女の方だって来れないかもしれないし、もし、来れたとしても我が家は狭いので大変なのである。

私だって、龍太郎が望むような生活をさせてやりたいのは、やまやまなんだけど、それも世の中の変化で難しいのである。都会と言うところは、実にその点では住み辛いところである。田舎だともっと自由にさせてやれると思うのだが、私も仕事があるし、いろんな事情があって田舎に引っ越すわけにもいかないのである。龍太郎には、申し訳ないが、ここは我慢してもらおう以外に手はないのである。

昨日までは、私の息子の淳一が龍太郎に付き合っていたが、同伴者として頼りないというのである。最もそれは、龍太郎が言ったのではなく、私の妻の圭子が言ったのである。

僕にも、それは理解できる。なにしろ、龍太郎は所帯を持っていても不思議ではない年頃なのに、淳一は小学校二年生なのである。龍太郎からすれば、淳一では、かえって迷惑なのである。子供は多分に気まぐれであり、その上彼の仕事を十分理解できないので、不十分なまま引き返してくることが度々ある。

そこで、圭子が気を使って夏休みの終わった今日から僕が龍太郎の仕事に付き合うようにと、僕の少し出てきた腹部を眺めて言うのである。

「一石二鳥じゃない！」って。

僕が渋ると私も付き合うからと言って、先に立って玄関を出ていくので、やむなく、僕の玄関を出た。龍太郎も待っていた。

圭子が行くぐらいなら、二人で龍太郎に付き合わなくても良いはずなんだが、これには理由があつてのことで、圭子が付き合うのは龍太郎ではなく、龍太郎と付き合う僕に付き合うというややこしい意味なのである。というのも、龍太郎は、どうゆうわけか女の人が側にいると鼻がむずむずしてくるらしく、くしゃみがでて、止まらないのである。おかげで肝心の仕事に身が入らないのである。

かつて、圭子が龍太郎に付き合ったことがあるが、どちらも鼻を鳴らして、帰ってきた。龍太郎はくしゃみを連発して、圭子は豚になって。

圭子が言うのには、龍太郎が彼女なら、一人の方がましだと言わんばかりに走っていくのでついていくのがやっとなで、へとへとに疲れてしまうと言うのである。それ以来、圭子は一人で龍太郎と行こうとしないのである。

「女だと思つて、リュウは、私を馬鹿にした」というのが圭子の言い分である。

リュウというのは、お分かりのように龍太郎の愛称である。「龍太郎」という名前は、僕が引き取ったときに付けた名前であるが、ご存知の人にあげたのである。しかし、彼の方は、余り喜ばなかった。半分嬉しそうに、半分馬鹿にされたような目で僕を見たのである。僕は、龍太郎の名付親なのである。

僕には、すでに淳一という長男と淳一の妹、美穂という長女がいて、これ以上家族を増やすつもりはなかったのであるが、捨てられた子供を目の前にして行政に任せるほど冷たい人間ではないので、可愛そうで引き取ることにしたのである。最後まで、引き取ることに懐疑的だった圭子を説得したのも僕だった。

圭子が渋るのは、我が家では龍太郎を引き取る前にすでに洋子を引き取っていたからである。洋子も例に違わず、僕が名付け親である。荻野目洋子にあやかって付けたのである。

小さな美穂が母親にでもなったような気分で可愛がっていた。人なつこく可愛い子供である。

我々は、大通りに出た。僕とリュウがふと気づくと、先に行っていたはずの圭子がいな。振り返ってみると、ショーウインドウの光に照らされた圭子の姿が遠くにあった。

今度は僕とリュウが歩道の中央に立って待つ身となった。リュウのは、「ちえっ！ ったく仕方のない奴だ」と言わんばかりの顔で圭子の方を見ている。彼は無口なので、口にこそ出して言わないが、彼の表情から、それは十分わかった。リュウにしてみれば、たとえ口に出したくても、相手が僕の妻なので言えないのである。

リュウの仕事があるので僕らは、先に行くしかなく、時々立ち止まって圭子が近づくのを待たなければならなかった。おかげで僕はリュウに詫げるしかなかった。

僕は、商店の並ぶ通りに一見だけあるラブホテルの前を通り、圭子に目の届く範囲で先を急いだ。

何回目だったか僕らが立ち止まったとき、圭子が息を切らせて、やってきた。僕はつい「遅い！」と行った。リュウも同意するように「フン！」と鼻を鳴らした。しかし、圭子は、全く意に介せずといった風である。

「ねえ、ねえ、ほら、あの宝石店にダイヤのペンダントトップのすごくいいのがあるのよ。」

「ふうん」と僕が言う。

「ふん」とリュウが言う。

「いくらだと思う？」

「さあ、50万ぐらい？」

「・・・・・・・・・・」

「じゃ、60万」

「小さいものよ。0.1カラットぐらいの」

「じゃあ、太分安いな。いくら？」

「3万5千円。帰りに見る？」

「どうでも良いよ」と僕は、興味なさそうに言った。「冗談じゃない。そんな暇ないよ」と言わんばかりのリュウ。

「良いじゃない。帰りに見てよ」

「ああ」と僕は気のない返事をした。「聞く耳なし」という態度でリュウは、先に歩き出した。僕もリュウに遅れじと付いて行く。

ところが、圭子は、また遅れがちになり、時々小走りに追いついてくる。

「ねえ、あの美容室改装しているのかしら？」

「・・・・・・・・・・」

「ねえ、ちょっと見てよ。ほら、あの服。私に似合うと思わない？」と僕の腕を引っ張るのである。

「かもね」

「絶対似合うと思うわ」

僕は適当な返事をする。リュウは「勝手にしろ！近づくんじゃねえよ。クシヤミが出そうだ」とばかりの態度である。

そうやって、僕らは予定の道を歩いていった。やがて、街路添いの店がちらほらと閉店していった。しかし、喫茶店や飲食店、スーパーだけは、にぎわっていた。

僕が汗を拭き多少疲れて、圭子の声も途切れがちになった頃、突然彼女が言った。

「ねえ、もうかえろ」

リュウは、その一言に振り返り、圭子をにらんだ。「なに！俺はどうなるんだ。俺は！」という表情を露骨にした。僕は、それじゃリュウが可愛そうなので、予定通りリュウに付き合うことにした。圭子は、あっさりしたもので「私、疲れた。ここで待ってる」と喫茶店の前でレンガ作りの花壇に腰を下ろしてしまった。

僕は、妻を一人残して行くのは多少心配だった。それで、時々振り返り、並木の向こうに小さくなっていく妻の姿を街灯の中に確認しながら歩いていった。そして、ついに見えなくなった。

リュウは、足を早め、ひたすら先に進んだ。僕も口をきかなかった。

(次号へ続く)

(6頁「数珠つなぎ」の続き)

旅

「ちょっと隣町まで・・・」その延長が知らぬ間に自転車の旅になっていた。

自転車旅行のポリシーは三つ。①時計を持たない、②畳の上で寝泊りしない、③筋肉を極力使わない。一番難しいのは三つ目だろうが。

身なりは走っているうちに薄汚れてくるが、昼夜を問わず酒も飲むし、根っからの貧乏旅行ではない。それでも、自分の体内に宿る自然の周期と、文明社会の襖の裏張ぐらいはよく観察できる。

走り出して数日を過ぎると、一日がやたらに短い。驚くほど淡白なのだ。人間以外の生物はこうやって淡々と生を全うしているのではないか、と思う。

「雨が降ったら?」。気が向けばびしょ濡れで走るし、やむまでじっとしていることもある。ちなみに自転車の大敵は雨よりもむしろ風だ。ただ、どんな悪天候も心が晴れていれば大した問題ではない。「晴れてよし、曇りてもよし富士の山、元の姿は変わらざりけり」。

季節は夏が圧倒的に多い。それ以外もなくはないが、なんとといっても夏が一番。「あんなクソ暑いのに?」。そう。生ビールと昼寝さえあれば酷暑もまた楽し、だ。どうせ暑いんだから、あきらめが肝腎。一方、寒い季節には芋焼酎が旅の友。

放浪といえれば無人駅に泊まるイメージがある。私も時折ご厄介になる。通称「ステーションホテル」はそういった放浪人の溜り場になることがよくある。その他、私の場合多いのがシーサイドホテル(浜辺)、リバーサイドホテル(河原)、ホテルレイクビワ(琵琶湖畔)、キャッスルホテル(城跡)、グランドホテル(ただの地面)、等。

旅先で知人の家を予告なしに訪ねることがある(あらかじめ連絡しておくなど、性格上無理だ)。支部報の新編集長、田北氏の実家(大分県・豊後竹田)にも立ち寄った。クソ田舎だったが、大きくて立派なお寺だったのでびっくりした。お母さんがパンやらお菓子やら、山のように持たせてくれた。

身の危険を感じたことは、治安の良い日本のこととてほとんどない。台風の中、ズブ濡れで標高1,100mの峠越えをしていて風邪をひきそうになったくらい。転倒は5年に1回あるかないかで、パンクがそれとしい勝負。走りながら居眠りをしていて「はっ」としたことはある。いずれにしても警察の職務質問ほどタチは悪くない。

色んな出会いがある。風来坊に好意的な人もいるが、常に招かれざる客を自認するのが風来坊の要諦でもある。

「凡人は旅をしても何も変わらないが、才能のある人は旅をしないとダメになる」という。私など前者の典型だが、こんな箱庭日本の旅がやめられない。目的地ではなく、過程こそが旅の本質だと思っている。結局、過程も行き先も風まかせになる。天才は旅に出る前から自分の行く道を知っている。その違いだろうか。(終)

「数珠つなぎ」のルール

- ①内容は硬軟自由 ②原稿量も1頁以上で自由 ③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。 ④指名された人は勿論拒否権なしです。

戦慄の新コーナー!!

京都橘女子大学

ニコヤしとみろ

大図研京都数珠つなぎ 第21回

小林倫道 さん

自転車
自転車で
旅に出よう

※今までに私が
自転車で旅した
主なコースです。

1日一番長く走ったのは、名古屋
港~自宅(大阪府茨木市)の約170km。
朝9時から夜11時までかかった。

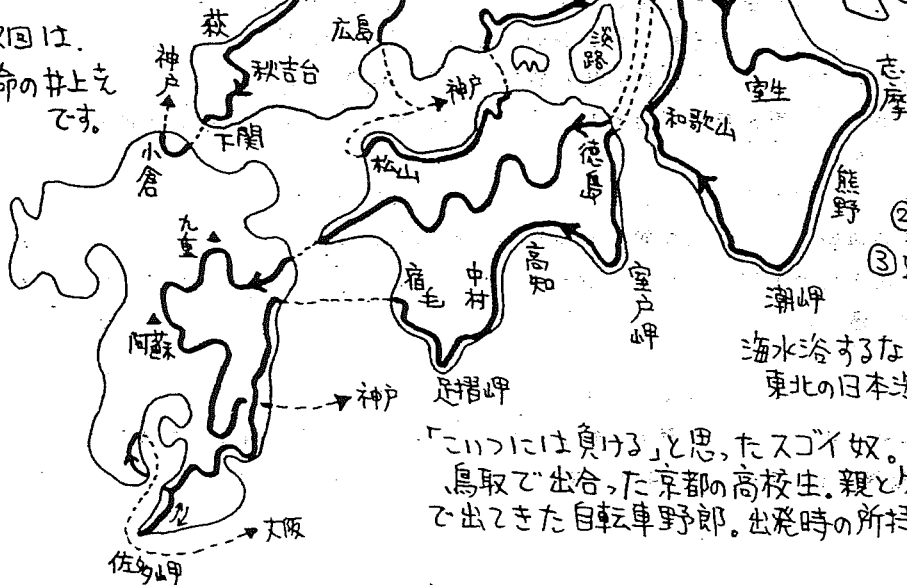
普通は1日平均100~120km。でも最近
は80~100km。これは体力が落ちたのだ
はなく、道草と生ビールが増えたためだ。

一番高かった峠、標高1,780mの安房(あほう)峠
(岐阜・長野県境)。

思い出の温泉ベスト3!!。①筋湯(大分県・久住)。
②平湯(奥飛騨)、③吉岡
(鳥取県)。

風呂に入れなかつた日、
最長、丸6日。

次回は、
立命の井上え
です。



今までに泊った
ヘンな場所
ベスト3!!

- ①無人商店の棚
- ②盆踊りの櫓の上
- ③遺跡公園の堅穴
住居

海水浴するのなら?
東北の日本海沿岸がベスト。

「こいつには負ける」と思、たスコイ奴。
鳥取で出合った京都の高校生。親とケンカして家出同然
で出てきた自転車野郎。出発時の所持金、820円!!